

尋常性ざ瘡治療患者のアドヒアランス向上にむけて薬局薬剤師が果たすべき役割

勝田 剛史¹⁾、藤本 亮²⁾、片山 珠季¹⁾、高田 潤¹⁾、前田 守³⁾、長谷川 佳孝³⁾、
月岡 良太³⁾、森澤 あずさ³⁾、大石 美也³⁾

- 1) 株式会社アインファーマシーズ
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 五条御前店
- 3) 株式会社アインホールディングス

【目的】尋常性ざ瘡の発症と悪化にはアクネ菌の増加が関与するため、治療には抗菌薬が使用されてきた。しかし、薬剤耐性ざ瘡桿菌の増加防止のため、レチノイド様作用を持つアダパレンと過酸化ベンゾイルが推奨されている。また、それらを含む外用治療薬(以下、対象薬)による治療患者の約6割が3ヵ月以上治療を継続し、顔面症例の73.4%、顔面以外の症例の58.1%に改善がみられたとの報告もあり、寛解まで対象薬の継続使用が重要と考えられる。そこで、対象薬使用患者のアドヒアランス向上のために薬局薬剤師が果たすべき役割を考察した。

【方法】2019年12月1日～2020年2月29日に当薬局で対象薬が初めて処方された患者に治療目的やポイントをリーフレットで指導し、これに次回受診予定日を記入して交付した。その後、来局時に自覚症状、副作用の有無、コンプライアンスを確認した。本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0050)。

【結果】初回処方患者36名のうち、27名(75.0%)が再来局し、さらにそのうち14名(38.9%)が再々来局した。自覚症状が改善した患者は再来局時で66.7%、再々来局時で100%であった。また、再来局時の40.7%、再々来局時の14.3%の患者に副作用が確認されたが、うち再来局時は63.6%、再々来局時は100%が治療継続となった。コンプライアンスでは、再来局時は85.2%、再々来局時は71.4%の患者が毎日継続使用できており、それぞれ3.7%、21.4%の患者が時々使用を忘れていた。

【考察】本調査で現状の尋常性ざ瘡の治療継続率とコンプライアンスが確認でき、来局時のリーフレットの指導だけでは100%の維持は困難であること、治療の長期化や自覚症状の改善がアドヒアランスを低下させる可能性が考えられた。したがって、薬局薬剤師は治療期間中も電話での服薬フォローアップ等で積極的に介入し、治療継続とアドヒアランスの向上に努めることが重要と考える。

(第15回日本薬局学会学術総会(2021年11月, Web)にて発表)